

“The Minister's Black Veil” 一考察

ーヴェールと憂鬱な笑みの謎ー

野呂 浩*

A Study of "The Minister's Black Veil"

—The Invisible Character Behind the Veil—

Hiroshi Noro*

Nathaniel Hawthorne's "The Minister's Black Veil" is said to be one of the most difficult stories to interpret. As an identification of the invisible character behind the veil simply by analyzing the story seems almost impossible, reading beyond what is presented is necessitated. In order to render this enigmatic figure visible, the work should be reexamined in the context of its relationship with other Hawthorne's works, and particularly the anguish hidden in a deeper part of his mind.

Nathaniel Hawthorne suffered quite severely from a kind of self-inflicted traumatic backlash related to the involvement of his ancestors in the judgment of "witches," including the infamous Salem witchcraft trials of 1692. Hawthorne's fear of living all his life under this shadow and his earnest prayer to absolve himself of this stain are clearly expressed in *The Scarlet Letter*. Another point is the nagging doubt that Hawthorne might reach the ending of his life without having earned recognition from the world that he was an artist at all, cutting himself off from human love and companionship.

When the story is reread with these factors in mind, one can conclude that the veiled Reverend Mr. Hooper failing at life is a revelation of Nathaniel Hawthorne's innermost reality.

I

今回分析する短編小説“The Minister's Black Veil”¹⁾は、1836年に *Token* 誌に発表され、1837年に、*Twice-Told Tales* に含められた作品である。

ナサニエル・ホーソーンには、一読しただけでは理解できそうもない作品が多い。この作品ももっとも難解な作品の一つと考えられている物語である。

ある日フーパー牧師は突然黒いヴェールを顔に着けて人々の前に姿を現す。彼は、そのヴェールを通して外の世界を自由に見ることができるが、読者はそのヴェールの奥にある素顔を見ることはほとんど不可能である。ヴェールの背後の実像を理解するヒントなども多くない。フーパー牧師のヴェールだけでなく、笑みもまた一つの謎である。

“The Minister's Black Veil”の主人公、黒いヴェールを着けたフーパー牧師の笑みについて、リチャード・フォグルは、その笑みのため作品が益々曖昧性に包まれると指摘している。²⁾

フーパー牧師の笑みは、ヴェールが隠しきれない口元から発せられる。ヴェールだけでも、不気味さと曖昧性が漂うことになってしまうのに、どのような精神構造の反映なのか簡単には分からないその笑みも、確かに曖昧性を増してしまう要素である。しかし、物悲しい、憂鬱な笑みであるなどと、笑みの特質が幾分説明されているので、むしろその笑みを分析することによって作品の曖昧性が減少する可能性がある。

ヴェールを着けることによって、フーパー牧師は

* 東京工芸大学工学部基礎教育センター教授
2002年9月10日 受理

人々に原罪を意識させる有能な人物である。³⁾ 否、ヴェールは悪魔であり、フーパー牧師はそのヴェールを恐れながらも、ヴェールを通して外界を眺めるのですべて悪魔的存在に見えてしまう。⁴⁾ さらに、18世紀前半に実在した、妻の死が原因で生涯ハンカチで顔を覆ったと伝えられているムーディ牧師との絡みからこの物語を解釈するアプローチなど⁵⁾で研究されてきた作品である。ある一つの観点から作品世界を眺めると、当然注視する世界はよく見えるようになる。しかし、あらゆる面を同程度に把握できる訳ではないので、どうしても見落とししてしまう世界がある。

あらゆる文学作品は必ずそれを創作した作家の影が何らかの形で反映していることは何人も否定できない。そこで今回はむしろこの原点に立ち返って、この短編小説を、作家ナサニエル・ホーソーンが呻吟していた問題、他の作品との連関、さらには、この作品執筆当時の書簡なども視野に入れて、作品全体を再読し、霧に包まれたような作品世界の全体像解明に挑むのが狙いである。

II

フーパー牧師の笑みは、物悲しく、憂鬱で、かつ、口元からほんの一瞬現れる。しかし、この笑みは、フーパー牧師の生涯を貫く特徴であり、自分と周囲の状況を冷静に分析した上での心的反応がたまたま一瞬表面にでてくるようである。

そのような笑みの背後に実在するはずの実像を覗きたくするのは極自然なことである。あくまでも笑みは心の動きの表現であって、その深層を認識しなければ、表層しか捉えないことになる。ヴェールにしろ、この笑みにしろ、如何にもその背後に実在するはずの素顔、正体を覗きたくする読者の心理を熟知して書かれた作品である。

フーパー牧師は、礼拝終了後、普段は老判事の教会員に招かれて食前の祈りを捧げる習慣だったが、突然ヴェールを着けて現れた牧師に教会員が動転してか、いつもと違って招かれなかった。そこでやむなく、一人牧師館に戻り、ドアを閉めようとした際に、振り返って会衆を見ようとしたがかえって会衆にその姿を見られ、ドアの中へ消えていく時に悲しげな笑みが漏れた。

世間の噂の種になり、スキャンダルにまで発展す

ることを心底より心配する教会の代表達がフーパー牧師を訪れた際にも、時折憂鬱そうな笑みが口元から漏れるのを目撃している。

婚約者エリザベスとの一対一の話し合いの場面は両者の真剣勝負のような場面であり、物語の一つのクライマックスのような感がする。「黒いヴェールをとって、どうしてそれをつけているのか訳を聞かせて下さい」と迫るエリザベスに対して、フーパー牧師は、微かな笑みを浮かべながら、「わたしたち全員がヴェールを投げ捨てる瞬間がくる」と言う。するとすかさず、エリザベスは「せめてその言葉からはヴェールを取って下さいな」と言い返す。聖職者故変な噂が流れても困るので何とかそのヴェールを外して下さいと再度エリザベスが懇願しても、フーパー牧師は同じ悲しい笑みを浮かべるだけ。このヴェールの背後にいと寂しいので、永遠にほっておかないでほしいとフーパー牧師はエリザベスに頼むが、しかし、エリザベスは、とにかくヴェールを取り外さない限り絶対に承知しない。一度でいいからヴェールをはずして素顔で私の顔を見て下さいと再度お願いしても、フーパー牧師からそれは絶対に出来ないと言われてしまう。そして、エリザベスはそれではさようならと言って出て行ってしまう。ドアのところに立ち止まってフーパー牧師を見ると、フーパー牧師はヴェールが自分を幸福から遠ざけることを考えてまた例の笑みを浮かべる。

子供達までもが、牧師を避けるようになるにつれて、さすがのフーパー牧師も、困惑ぎみになる。

不思議なことに、フーパー牧師自身も自分のヴェールを相当嫌悪しているようで、ヴェールが拡大されて映ってしまう鏡の前とか、水面に自分の姿が映ると恐ろしいので、泉に腰を屈めて水を飲もうとすることなどは避ける。

風でさえも、ヴェールを決して吹き飛ばすようなことはしないと信じられていたとの説明も加えられている。勿論、フーパー牧師は、恐怖で震える人々の青白い顔を見ると淋しそうな笑みを浮かべる。

フーパー牧師の死際、生涯りっぱな生き方を貫き今や天に凱旋しようとする牧師さんのヴェールを外して下さいと、クラーク牧師に頼まれても、絶対にヴェールは外させないと最後の力を振り絞って抵抗する。依然として、あの微かな悲しそうな笑みが口元で明滅する。そして、何と、フーパー牧師は、

「誰の顔にも黒いヴェールがある」と叫んで、口元に微かな笑みをたたえたまま亡くなったと書かれてある。何やら無気味な叫び、薄気味悪い死に方である。いずれにしてもこの笑みは、これまでの考察から、フーパー牧師の生涯を貫く一大特徴であり、何かを悲しみ、憂鬱と認識していることだけでは誰でも容易に分る。

ヴェールと笑みは視認可能だが、それらの背後に必ず存在するはずの真相を確認できるような説明が少ない。ヴェール着用の理由、悲しい笑みの精神構造を突き止めるにはどうしても解釈の作業が必要になる。

ヴェールと笑みの背後の世界よりも、ヴェールがもたらす恐ろしい拒絶反応を描いているのだと考えたくもなる。ナサニエル・ホーソーン作品は、何らかの結果から物語が始まる場合があるので、そのような結果をもたらす根源を問題視していないように理解したくなるのも無理はないが、しかし、だからといって、それでは、作品に表現されていないものは重要視する必要などないと結論づけることはできない。今回の作品を仮に描かれている世界だけを読むと、ただ、薄気味悪い黒いヴェールをある日突然顔に被り、物悲しそうな笑みとともに一生を送った奇怪なフーパー牧師物語となり、解説の困難さなど全くない作品になってしまう。しかし、これでは、本質を覗かない、表層のみの読みと言わざるを得ない。

勿論、ここで即断は避けるべきだが、ナサニエル・ホーソーンは、今回の作品もその一つであろうが、むしろ、結果を描くことによってその根源の解明へ誘っているとも考えられる。つまり、一見何の変哲もないような物語であっても、実は、作品自体もヴェールのようなものをかけられていて、そのヴェールの奥の見えない世界を見る挑戦を読者に突き付けているのではなかろうか。

実は、ナサニエル・ホーソーン自身が、『緋文字』の序文とも言える「税関」の章で、書物を世に問う際には、一番内奥の「私」はヴェールの背後に隠しておけるかもしれないと明言している。⁶⁾とするならば、今回分析している作品もヴェールに包まれ、一番奥深い部分に、「私」である、「作家ナサニエル・ホーソーン」が秘められているはずと、とりあえず考えることが許されるのではなかろうか。

分析のメスを使用して、ヴェールの奥の世界を分析したくても、対象が見えない限りいくら鋭利なメスでも使いようがない。フーパー牧師のヴェール、および、笑みの内部から眺めるのが一番理想的なアプローチである。つまり、いかなる作品もそれを創作した作家自身が意識しようがしまいが様々な形でその作品に入り込んでいるので、フーパー牧師の心に、これではなかろうかと推察できる作家の心象風景を当てはめてみる手法で内部から眺めてみたい。

III

この作品の作者であるナサニエル・ホーソーンの分身と考えられるフーパー牧師のヴェールを理解するためには、ヴェールで秘めたいくなるような隠し事、あるいは、悲しむべき事柄が、ナサニエル・ホーソーンにあるのかどうかをまず確認しなければならない。勿論、今の段階で、フーパー牧師がナサニエル・ホーソーンの分身であると断定して論を進めるのではなく、あくまでも仮定して、フーパー牧師の心の中に、ナサニエル・ホーソーン心を入れてみて、作品の謎が解けるかどうか試しているのである。

ナサニエル・ホーソーンが、自分の先祖が犯した消し難い歴史的実実に呻吟している赤裸々な告白が、『緋文字』の序文でもある「税関」の章に吐露されている。⁷⁾

ナサニエル・ホーソーンの生まれ故郷であるセイラムは、自分の一族が深い根をはっているところであり、先祖の死体はこの土地と混ざりあい、自分が歩くと何やら自分の肉体と共鳴すると前置きして、聖書と剣を携えて英国からアメリカ大陸に渡ってきた初代の先祖、ウィリアム・ホーソーン（1607～81）に触れ、彼は、軍人、立法者、裁判官であり、教会の指導者であったと述べている。この先祖は、特にクエーカーの女性信徒などを鞭打ちの刑で迫害したことなどで知られている。

また、彼の息子、ジョン・ホーソーン（1641～1717）もまた、迫害精神を受け継ぎ、悪名高いセイラム魔女裁判で名を轟かせたと記してある。このアメリカにおける二代目の先祖、ジョン・ホーソーンは、セイラム魔女裁判の判事の一人で、少なくとも絞首刑に18回立ち会ったと伝えられてい

る人物である。魔女容疑者レベッカ・ナースは、ジョン・ホーソーンに血をすすらせるようにと呪って死んだと言われている。⁸⁾ このウィリアム・ホーソーンとジョン・ホーソーンの二人の先祖の名前が、『緋文字』に書かれている訳ではないが、アメリカ史を少しでも知る者は『緋文字』の序文の内容からすぐにウィリアム・ホーソーンとジョン・ホーソーンであることが分かる。

勿論、1692年のセイラムの魔女裁判で絞首刑を執行した場所ギャローズ・ヒル「首吊りが丘」の名も登場する。そして、どんな善行よりもこのような悪行は後世に残るであろうと記した上で、魔女達の血が先祖の汚点となり、先祖の骨が完全に土になっていなければまだその汚点をとどめているに違いない。こういう自分の先祖が生前の残虐行為を悔いているのか、または重い罪のあがないに苦しんでいるのかどうかは分からない。自分は彼等の代表者として、彼等の咎を一身に引き受け、彼らが招いた呪が、消えてなくなることを祈るばかりであると告白している。

しかも、先祖の本性と自分の本性は切っても切れない絆で結ばれているとも述べている。このような告白の内容から、フーパー牧師を眺めると、なぜ、ヴェールを着用し、悲しい笑みを浮かべるのかを説明する必要などなくなろう。ヴェールは、先祖の歴史的汚点の象徴であり、その黒い歴史を悲しみ隠したくなるナサニエル・ホーソーンの苦悩がそのままフーパー牧師のヴェール、憂鬱な笑みに反映していると考えられる。

魔女裁判などで、女性の迫害、処刑に何らかの形で関わったのが、ナサニエル・ホーソーンの先祖の歴史である。そうすると、しゃがみこんだフーパー牧師の素顔を見てかどうかは断定できないが、棺桶に入れられた若い女性の死体を微かに震えさせる場面とか、フーパー牧師が司式する結婚式の花嫁が青ざめて震える箇所などは、勿論魔女裁判事件で処刑された女性であるとのコメントなどはないが、迫害されて処刑された女性の極度の恐怖心を再現しているとしても読まなければ単なる恐怖小説、ゴシック物語になってしまうではないか。婚約者のエリザベスが登場しても結局は結ばれない展開なども全く不思議ではなくなる。婚約者との話し合いは一種のクライマックスなどではなく、むしろ、微かに震

える女性の死体、花嫁の場面の方が、作家の主張したい見解が赤裸々に表現されている意味でクライマックスの場面である。特に女性とのコミュニケーションが不可能なフーパー牧師に創造されていることも頷けよう。

死体さえ震えさせるフーパー牧師の素顔とは一体どのようなものであろうか。これだけでも、もう一つの考察を書くテーマになろうが、作品中の場面だけでなく、魔女裁判事件の歴史も踏まえて判断するならば、自分達とは異なる特質を持つ存在を抹殺、処刑したくなる、「殺意の眼差し」である。したがって、フーパー牧師の素顔には、ナサニエル・ホーソーンの先祖の「殺意の眼差し」のようなものも秘められた形ではあるが描き込まれていると読まないと、フーパー牧師を見て死体が震える場面が理解できなくなる。

ナサニエル・ホーソーンの初代、二代目の先祖は教会の指導者でもあったのだから、フーパーを牧師に設けても何らおかしくはない。物語の設定年代は、一度ベルチャー総督の頃、フーパー牧師は総督選挙の特別説教者に任命されたことがあると書かれてあるので、1730から1741年の間ということになる。二代目先祖、ジョン・ホーソーンが没したのが1717年である。ぴたりと一致する年代設定ではないが、ジョン・ホーソーンが生きた時代とさほど変わらない時代設定も如何にも意味ありげではないか。

女性の死体を震えさせ、しかもこのような時代設定も考えると、この物語は原罪物語であるとか、あるいは、フーパー牧師を、フロイド心理学的な観点から分析して、大人に成長することを嫌う“escapist”⁹⁾と読むのは、まさにある視点からの読みに過ぎなくなるのではなからうか。

そのように解釈したくなる物語の奥に真相が秘められているのである。自分の先祖の醜い歴史によって精神的（心的）外傷を受けたトラウマティック・ストレス患者のようなナサニエル・ホーソーンの心的状態、および、先祖に対する厳しい断罪の両面がフーパー牧師および物語の骨格そのものに色濃く反映している。憂鬱な笑みも、このように考えてくると、心的外傷故自分の属する世界と一体化できない自分の運命を直視しつつも、受容せざるを得ない精神構造の表現と読むこともできる。

IV

フーパー牧師は、確かにヴェールで社会から遠ざけられてはいるが、一方、意図的に引きこもり、意識的に社会との一体化を避け、嫌うような人物にも見える。このような特徴は、決して、魔女迫害に関わったナサニエル・ホーソーンの前祖たちの特徴ではない。

ナサニエル・ホーソーンは、ボードイン カレッジを1825年に卒業した後、1837まで、12年間もの間、自分の生まれ故郷セイラムの、薄暗い一室でひたすら、歴史、文学関連の書等膨大な量の読書をし、作品を書く作家修行に励む。こうした孤独な年月の間に、自分の心と性格が形成されたとナサニエル・ホーソーンは述懐している。¹⁰⁾

ナサニエル・ホーソーンが自ら選択したこのような生き方に決して満足していた訳ではなく、牢獄とも言える自分自身の世界に閉じこもり、結局は、社会との接触、絆を待てなくなってしまった自分の哀れな姿に絶望していたようである。そのような心境が、友人ロングフェロー宛の手紙に素直に描かれている。

その手紙の中身を要約するならば、自分の生活は実に陰鬱で、ふくろうのように暗くなるまでは外にでていかない。社会から引きこもり、自分自身の虜となってしまう、自分を地下牢に監禁してしまい、そこから出る鍵を見つけられない。自分をそこから解放することなど恐ろしくてできない。喜びや悲しみを分かち合わないほど恐ろしい運命はない。この10年間、生きてきたのではなく、生きることを夢見てただけ。老後の宝となる楽しい思い出などはまったくなくなどと書かれてある。¹¹⁾

フーパー牧師が、顔の奇怪なヴェールを除けば、生涯比較的平凡な生活をし、社会の中である一定の役割を演じながらも、世間との深い接触を断つ点は、実はナサニエル・ホーソーンのこの頃の姿とぴったり重なる。

このように分析してみると、ヴェールと笑みの奥が見え始め、曖昧性が消えはじめる。これまでの考察結果をそのままフーパー牧師のヴェールの奥に入れてみる、つまりヴェールの内部から眺めると、なぜフーパー牧師が、ヴェールを着用し、悲しい憂鬱な笑みを浮かべつつ、社会との一体化を避けて一生過ごさざるを得ないのかがよく理解できる。

一番内奥の「私」はヴェールの背後に隠しておけるかもしれないと、『緋文字』の序文「税関」で、ナサニエル・ホーソーンが述べていることは既に指摘したが、これまでの分析で、巧妙に隠れている、その「私」の姿をある程度明らかにできたのではなかろうか。

勿論、これは、見えない世界を覗き見るために今回筆者が用いたアプローチで見えてきた世界である。これで物語のすべてが解明できたと断定できる程の自信はないが、しかし、少なくとも、ヴェールと憂鬱な笑みの奥に、今回指摘したような世界を当てはめると、フーパー牧師の正体が見え始めることだけは間違いない。

V

さらには、他の作品との絡みも分析すると、この作品の位置付けがよりよく理解できよう。花嫁の指が震え、皆は数時間前に埋葬された娘さんが結婚式を挙げるために墓から戻ってきたのではと囁く。そして、続けて、これほど陰惨な結婚式が他にあるとすれば、それは弔鐘を鳴らしたという例の有名な結婚式だけでしょとの件がこの作品に書かれてある。これは、今回分析している作品と同じ年である1830年に発表された“The Wedding Knell”¹²⁾のことである。65才もの老齢になった紳士が三度も結婚の経歴がある昔の恋人である老婆と結婚する話である。二人とも時がもはや残されていないので、まもなく墓場に向かうであろうから、結婚を祝う鐘は、何と葬式の弔鐘が高らかに鳴らされるという、これまた実に薄気味悪いグロテスクな物語である。これも、実は作家ナサニエル・ホーソーンの影響が色濃く反映した物語で、世間から認められる作品などもなく、まともな生き方ができなく、寂しくこの世を去るのではないかという恐怖心を形象化した作品であるとの研究を筆者は以前したことがある。

今回研究した作品は、これまで眺めてきたように、先祖の歴史と自分自身の運命的生き方を背負ったナサニエル・ホーソーンの分身であるフーパー牧師を最終的には墓場に葬る物語である。つまり、魔女を迫害し、処刑に同意した消し難い血塗られた歴史、および、世間との接触を断つ忌々しい自分の生き方との惜別宣言書と読める。しからば、このように先

祖および自分を葬り去り、その後、どのような目標を、ナサニエル・ホーソーンは抱いていたのか。

新婚当時に執筆された作品と考えられている “The Artist of the Beautiful”¹³⁾ (1844) には、別次元の世界、つまり、芸術世界に身を投じ、芸術的永遠性を宿す作品制作へと向かう人物が登場する。異質な存在を迫害し、処刑する世界ではなく、美の創作に献身するナサニエル・ホーソーンの姿が投影された世界である。このような美の創造の境地に至るまでには少し時間がかかったようである。

“The Minister's Black Veil” と “The Wedding Knell” の二作品は、このような意味で、“The Artist of the Beautiful” に繋がる作品であり、それぞれ三作品とも独立した作品ではあるが、同時に繋がりがある三部作と纏めることができる。

注

- 1) 使用したテキストは *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. IX. *Twice-Told Tales*, "The Minister's Black Veil." (Ohio State Univ. Press, 1974)
- 2) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman: University of Oklahoma Press, 1975), p.37.
- 3) Cochran, Robert W. "Hawthorne's Choice: The Veil or the Jaundiced Eye." *College English*, 23 (1962), pp.342-46.
- 4) William Bysshe Stein, "The Parable of the Anti Christ in "The Minister's Black Veil." *American Literature*, 27 (1955) pp.386-392.
- 5) L. B. V. Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston: G.K. Hall & CO. 1979), pp.199-200.
- 6) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. I. *The Scarlet Letter* (Ohio State Univ. Press, 1974), p.4.
- 7) *The Scarlet Letter*, pp.7-8.
- 8) Robert L. Gale, *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1991), p. 213.
- 9) Frederick Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*, (New York: Oxford Univ. Press, 1966), p.109.
- 10) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. XV. *The Letters 1813-1843* (Ohio State Univ. Press, 1974), p.494.
- 11) *Ibid.*, pp.251-252.
- 12) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. IX. *Twice-Told Tales*, "The Wedding Knell." (Ohio State Univ. Press, 1974)
- 13) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Vol. X. *Mosses from an Old Manse*, "The Artist of the Beautiful." (Ohio State Univ. Press, 1974)